

社会主義的労働の社会学のための覚え書

ライナー・テール

一九六三年の春に、ベルリンのアンボルト大学付属哲学研究所のある研究グループによって、ベルリンにある二つの電器工場についての統計的な調査がおこなわれた。任意抽出されたサンプルは、各々の工場から「生産改革者」約一七〇、「非改革者」約一七〇、合計六七七人であった。

この調査の結果は、共産主義的人間像についてのマルクス主義理論と関係させてみると、きわめて示唆的なものである。そこでまずこの理論を一瞥してから、この経験的な成果を報告することにしよう。

マルクス主義の世界観は、人類は労働過程のなかで形成されつねに発展しているという経験的に実証できる事実認識を根底にもっている。労働とは人間が道具や機械等を用いて自然とかわりあうことである。いわゆる世界史の全体は「人間的労働による人間の産出」である。他方また労働は人間の本質的な生活機能である。労働時間はたんに人間が自覚している時間の少なからぬ部分であるだけではない。この時間に彼はエネルギー、作業能力、知識や思考力といった、その生活能力を消費するのである。

労働において、人間の創造力はあらわれ、それはわれわれの眼前で次第に高い水準を獲得していく。人間が創り出し使用している生産諸力や交通通信手段は、自然現象に関する広範な知識に依存している。その活用は、きわめて細分化された種々の分野における熟練と創意とを前提としている。

しかしながら、これらすべてが個人のなかに個人によって生じるかのような見方はまったくの虚構である。正しくはこれらすべてのことは全体としての人類に帰せられねばならない。しかしこのような誤りにたいする一定の配慮をしたらうと、人類全体の力と可能性の総体を人間の一つの理想像としてまとめあげることは目的にならなかったことであり、詩人や哲学者はつねにそれを試みてきた。彼らはしばしば、遠い過去においては個人はその時代に可能な限りの人間の生活機能の総体を現実に体現していたと考えがちであった。しかし実際には、歴史的過程は個人にたいしては、あの理想像の抽象的基礎となった類にたいするのとは、多くの点で異つたものとしてあらわれた。具体的個人は「人間」と完全には合致しない。なぜならば、全体としての社会、したがって理想像にとつては、所有権とか生産手段や生産労働にたいする命令権力の問題がまったく無意味であるのにたいして、階級社会における具体的個人は、このような所有権をもっているかいないかのどちらかではないからである。理想像を設定することによって、このような事情は看過されがちになる。(逆に、この理想像を現実化するには生産手段の私有を廃止することが前提となる。)歴史は人々の生産手段にたいする様々の位置から生じてくる多様な現象を示している。

近代的経営者は、生産手段をもたぬ人々にたいして、労働過程における彼らの利益は経営者の利益と同じものであるという意識を与えるための努力を惜しなかつた。そのために労働心理学的知識にもとづいて労働条件を友好的で快適なものにしようとする様々の努力がなされた。しかしながら、すでにマルクスは、資本主義的工場における労働過程は、結局はこの労働過程が前提としてもっていた社会関係を毎日再生産しているのだということを示している。その関係の一方には、生産手段をもたず、したがって彼の労働力を売らねばならない労働者が、他方には、生産手段

を所有し、⁽²⁾そしておそらくさらに多くの生産手段を獲得することができる資本家がいる。かくして、賃労働は自己自身を賃労働として生産するのである。賃労働は自己自身との関係に入る。⁽³⁾賃労働は自己自身における弁証法的矛盾である。それは自己自身につねにひきもどされる。資本主義において、労働とその社会関係とのあいだにこの唯一つの相互作用しか存在しないならば、発展方向も資本主義的生産の固有の結果として永遠に確定されたものとなるであろう。⁽⁴⁾賃労働＝資本関係の図式はみずからに一つの方向、すなわち、永遠の存在という方向を示している。それは合目的な図式である。過程が一度進行しはじめると、それは労働市場の偶然性を支配しはじめる。「労働者と資本家は売手と買手として労働市場で出会えるものはもはや偶然ではない。その一方をつねに労働力の売手として労働市場に投げ返し、彼の生産物がつねに他方の購買手段に変わるのは、過程そのものの節書きである」⁽⁵⁾。あるいは、それは資本主義が存在する限り労働者がぬけ出すことのできない悪魔の環ともいべきものである。

労働者が、生産手段の非所有者として、この関係を感じ取る契機はつねに存在している。それは、労働者が生産過程にたいして決して親密な、人格的なかわりあいをもっているのではなく、そこに自分と自分の家族の生計の道をうるための利害しかみていないということから、当然のことである。彼の生活における主要な活動である労働は、この目的のための手段にすぎない。彼の存在の意味は、彼がその創造力をはたらかせる過程の外にある。その過程そのものは、彼の間人性とは無関係なままである。そして彼は労働過程からますます疎外されていく。なぜなら資本の拡大再生産は同時に資本にたいする彼の社会的依存関係をますます強化するからである。労働者たちがこの関係と妥協していく限り、労働過程にたいする彼らの無関心は習慣にまでなり、彼らの生活態度を形づくる。生産手段を国有化すればこの生活態度が自動的に取除かれるわけではない。むしろこの移行は、これらの労働者達の生活態度を説得と労働条件の改変を通じて徐々に変えることができるための前提なのである。

全体としての社会の能力と欲求から一つの人間の理想像を創りあげることがきわめて興味深いことではあるが、以

下にみるように、もっと大きな理由から問題を含んでいる。資本主義によって造り出された近代的生产は「労働者の創造的な欲求と素質からなる一つの世界を抑圧し、その部分的能力の発達を温室的に強制することによって、労働者を奇型にまでゆがめてしまう。それはちょうど、ラ・プラタ州において毛皮と獣脂をとるために獣をまるのまま一匹屠るのと同じことである」⁽⁶⁾。

近代的生产過程は、働く人がとる一部、とくに技術者と労働者階級の一定の部分にたいして、興味深い課題を提出する。科学は直接的な潜在的生産力となる。しかし労働者階級の大部分にとっては、生産の発展のための手段は「生産者の支配と搾取の手段に転化し、労働者を破壊して部分的人間にし、彼を機械の部分品にまで貶め、彼の労働の苦痛によって労働の内容を破壊する。自立の力としての科学が生産過程に合体されるにつれて生産過程の精神的能力から労働者は疎外される」⁽⁷⁾。これが、労働者ないしは労働者階級の大部分が労働過程にたいして人間的関係をみるこゝとができない第二の理由である。かくして労働者は労働過程のなかでは自己の外にある。労働過程の外部でのみ彼は人間的な生活を営むのである。資本主義によって生み出されたこの生産条件は、社会主義においてもさしあたりは存在する。それは、共産主義的社会秩序への移行のための重大な問題であり、社会的手段のすべてを傾注してもまだ漸進的にのみ解決できるような問題である。

マルクスとエンゲルスの歴史的な功績は、彼らが生産様式の革命すなわち社会の生産力と社会関係そのものの変革を要請したことにある。彼らは初めて、疎外をそれ自身の廃棄の徴候として認識した。マルクス、エンゲルス、レーニンは、労働者階級が小農やインテリと同盟し都市や農村におけるすべての反体制の階層と密接な接触を保ちつつ、現存する資本主義的諸関係のなかから必然的に社会主義的・共産主義的社會秩序を建設する力を発展させることを示した。この力の形成と発展のための闘争の問題、搾取の廃止と新しい社会秩序の建設のための闘争の問題が、マルクス・レーニン主義理論の核である。この理論によって、あの理想像の現実化は一つのユートピアから科学になった。

理想像そのものが歴史的制約の刻印から解放され、実践的な活動過程のなかで、たえず具体化されていくのである。

共産主義の豊かさは、物質的生産力の高い発展段階と、日常的な必需品の豊かさにもとづくものである。この前提なしには、共産主義はただ欠乏を一般化するだけにすぎず、この一般的な欠乏とともに、必需品のための闘争が再び始まり、過去の歴史の全体が再びくり返されねばならないであろう⁽⁸⁾。しかしながら、物質的条件は共産主義の富のための一つの前提にすぎない。この富そのものは、全人類の様々な能力と、多くの欲望と、諸々の関係と、それらの享受の総体を自己のうちに発展させている個人のなかに存在する⁽⁹⁾。

この富の創出は——先に述べた物質的な前提を別とすれば——とりわけ労働の課題である。生産手段の社会主義的な共有によって、労働する人間は生産と生産物にたいする支配力を獲得した。労働者がたんに技術的にばかりでなく科学的根拠にもとづいて政治的にも経済的にも統制権力を行使することによって、彼は協力者にたいする関係を発展させ、これまでは、私有財産にもとづいて政治的—経済的管理権を行使している社会のほんの一部分の人々によって独占されていた分野における能力を開発するのである。今日の技術の発展段階は、すでにマルクスが提起していた問題、すなわち、労働者階級のかんりの部分に「部分的能力の温室的発達」と「創造的素質と精神的能力の奇形化」を強制するほどにまで、これ以上機械を発達させねばならないか、という問題を強調している。糊料に技術的な見地からすれば、人間が普遍的能力、とりわけ精神的能力を発展させることを可能にするような機械を想像することは、今日ではむずかしいことではない。そのような機械は、それを扱う者のそのような能力を前提としてさえるであろう。そのような機械の産出は、人間に人間としての資質を与えるものであるが、それは長い実践の過程として理解されねばならない。そのための第一の前提は社会主義的生産関係の建設である。

労働が人間の普遍的能力を発展させることによって、生活における労働時間と余暇の分裂は消滅する。休息時間の形態としての趣味は、人間が労働のなかでまだ発展させることのできない全体性の貧弱な代用品である。反対に、も

し労働が全体性の活動と展開になれば、それは第一の生活欲求となり、そのときには労働過程の外にある趣味はせいぜい労働過程に含まれている内容の全体を補完して完全なものに仕上げるだけのほたらきしかもたないであろう。人生の喜びはもはや本来的に創造的な過程である労働の外にはなく、非生産的に自己の中で行われるのでもなければ、ラジオやテレビをただ視聴している場合のようなまったく受動的なものでもなくなり、変革と改変の間断ない運動のなかに存在するようになるであろう。人間の変化にたいする欲望は、今日ではほとんど仮装舞踏会やまったく皮相な流行の変化というような他愛ない他人真似の形でしか現われない。それは何ら性格や能力を変化させないし、新しい変革のための出発点ともより高められた足場ともならないのである。

このように発展しないことの非生産性は(他の欠陥とともに)、容易に認めることができる。そのためには企業家がもっている多くの可能性との比較をおこなってみさえすればよい。企業家は、獲得したものを取入として消費することもできるし、貯蓄として保存しておくこともできる。また、それを改めて流通を通じて生産に投入することもできる。そしてそこでは、それは新しい価値の創造者として機能し、生きもののように増殖するのである。「しかし現実には、ブルジョア的に限定された形式がとりざられた場合、富とは、普遍的な交換のなかで生み出されてきた個人の欲求や能力や満足や生産能力等の普遍性以外の何ものであろうか？ 自然力にたいする人間の支配の完全な発達とは、いわゆる自然と同様に人間自身の自然を支配することではないであろうか？ それは、これまでの歴史的な発展すなわちすべての人間的能力そのものの発展の全体だけを前提として、人間の創造的な素質を完全に仕上げることを既存の尺度と比較してではなく絶対的目的としているのではないか？ その目的は一つの規定性の中で再生産されるのではなく、その全体性を生産するのではないか？ 何らかの形成されたものとしてとどまるのではなく、生成の絶対的な運動のなかにあるのではないか？」⁽¹⁰⁾

「……環境の変革と人間の活動あるいは自己変革との一致は、革命的実践としてのみ把握され、合理的に理解され

ることができる⁽¹¹⁾。われわれは、環境の変革は、まず生産手段を社会主義的な共有に移すことにあり、その後労働過程の変革が進行させられるということを見た。ドイツ民主主義共和国では、生産手段の圧倒的な部分が国有あるいは団体所有に移されている。かつては開放されていたベルリンの境界が閉鎖されたことによつて、今後は国境交通を——すべての国境におけると同様に——規制することが可能になったため、社会主義の建設を破壊しようとする反共的—帝国主義勢力の仕事場は著しく制限された。社会主義の力はいまではより強化されて、労働過程の変革にむかっている。「環境の変革と人間の活動あるいは自己変革との一致」は方法的な根本原則であり、いわば国家的原理である。ドイツ民主主義共和国国家評議会議長のある声明は次のように述べている。「労働の生産性を高めること、それはすなわち、科学を習得し、新しい技術を身につけ、指導と計画と組織の先進的な方法を生産に適用することである。生産における改革者は、より高い労働生産性のための闘争における先進者である。彼らの労働の結果、偉大な経済的成果があがるだけでなく、人間そのものが変革される。すなわち、意識が高まり、古い慣習が克服され、社会主義的な人間が形成される⁽¹²⁾」。この一致は社会的組織や国家的制度や学校の協力なしには起りえない。生産が組織されあらゆる技術的可能性が利用つくされた結果、生産は直接的に教育的機能を営むか、あるいは社会があらゆる教育程度と年齢層に応じた教育制度を準備することによつてえられる一定の教育水準をその前提としている。全社会的雰囲気、すなわちすべての文化的—政治的風潮が勤労者たちに、学習し自分達の責任を自覚し社会的決定に参加し、技術と科学の進歩について考えることを奨励し促進するよなものになっていなければならない。多くの人がとどつては、資本主義時代の慣習からひきつがれている個人的な抑圧を克服して革新への第一歩を公然と踏み出したり、あるいはせいぜいそれを支持して実践のなかにとり入れたり、自主的な決定の責任をとったりすることのなかにすでに困難が生じている。したがつて、労働者階級の党、すべての社会的組織と国家的機関は、勤労者にたいして社会過程にたいする彼らの客観的、創造的役割を自覚させ、そこから自発的、創造的な力に新たに加わらせることをその主

要な任務としている。

個人における類的本性の発達についての観察は、これまであまり整備されていなかった。この観察を統計学的認識に適うように、体系的—方法的に整備したならば、それは主として人口学的なデータに限られたであろう。世界的信念とか、労働や社会一般にたいする態度というような本質的規定の考察に関する限り、これまでは直観的な評価に依存していた。そこで、最近、これらの評価を客観的—統計的研究におきかえようとする試みが行われるところであつて、われわれがとりあげようとする研究グループの、多くの点において国民経済全体の典型をなす二つの工場における調査も、勤労者の労働過程への関与がどの程度の発展段階に達したかについての豊かな示唆を与えるものである。

四つのグループから任意抽出された人々すなわち、工場Ⅰ生産改革者、工場Ⅰ非改革者、工場Ⅱ生産改革者、工場Ⅱ非改革者にたいしてまず次の質問が出された。「どのような条件のときにあなたは仕事に満足を感じますか」。これにたいして次の選択項目が与えられる。(a) 一日の仕事に成したよい報酬、(b) 社会的評価、(c) 上司との好ましい関係、(d) 同僚との好ましい関係、(e) 自立的な責任ある仕事、(f) 変化に富んだ、おもしろい仕事、(g) 清潔な労働条件。これらの選択項目に被調査者自身がそれに与える重要性に応じて順位をつける。その場合、もっとも重要なものは七、他のものはそれが各人の中で占める位置によつて、また他の選択項と同じ順位を共有するか否かによつて六—〇までの数字で示される。えられた結果のなかから、もっとも高い順位で選ばれた項目についてだけ示せば「表1」のようになる。

この質問の組み合わせにたいしてえられた基礎的情報の全体を考察し、被調査者のグループごとの選択項目の評価についての平均値と分散を出す「表2」のとおりである(これは今のところ、改革者についてしか出ていない)。

われわれは次の諸点を指摘することができる。(a) 二つの表の比較は、選択項目の選択の頻度と順位の差異を示

<表1>

	無関心	報酬	社会的 評価	上司と の関係	同僚と の関係	自律的 労働	興味あ る労働	労働 条件	報酬と他項 との組合せ	その他
工場I 改革者	4.3	11.6	1.9	4.9	11.1	20.3	11.7	4.9	1.8	25.3
工場I 非改革者	2.8	24.4	3.4	5.7	13.2	10.8	14.8	8.5	5.1	11.4
工場II 改革者	6.6	19.9	2.4	1.2	7.8	23.5	9.5	3.0	2.4	23.5
工場II 非改革者	9.2	28.9	2.4	1.7	9.8	8.7	9.2	7.5	5.8	16.0

<表2>

	無関心	報酬	社会的 評価	上司と の関係	同僚と の関係	自律的 労働	興味あ る労働	労働 条件	報酬と 他の 組合せ
工場I 平均	—	3.0	1.4	2.4	3.4	3.8	3.7	1.9	—
工場I 分散	—	6.4	3.7	5.5	21.4	7.6	6.5	4.8	—
工場II 平均	—	3.2	1.3	2.5	3.4	4.0	3.1	1.7	—
工場II 分散	—	7.8	3.6	5.6	6.0	7.2	7.1	4.9	—

す。それはえられた数字を色々を利用して読みとることができる。(b) 答の頻度の分布は、両工場において類似している。(c) 分散は、どの選択項目に関して意見のある程度の一致があるか、またどの問題において、選択項目の評価についての意見が集団のなかで移行しあう傾向が強いを示している。

次に、本質的な内容の問題に入ります(表1)から考察しよう。予想されるとおり、「仕事に応じたよい報酬」という条件に、最大の度数が与えられている。ここで考慮しなければならないことは、この目標の評価は共産主義の発展段階の最初のものに照応しているということである。それはドイツ民主主義共和国が現在経験しつつある段階であり、社会主義といわれているものである。現在、経済政策上の綱領のもつとも重要な点は、仕事に応じた正当な報酬の原則を完全に発展させ、国民経済の急速な発達のために、経済的な刺激を目的意識的に作用させることにある。この調査の直前に、この原則が前より強く宣伝されるようになっていた。工場労働者たちのあいだで、しばしば憤激の種となり論議的となっていた時代遅れの報酬制度が修正されはじめていたのである。

当面の問題からみて、社会主義の原理を簡単に定式化すると次のようになる——各人はその能力に応じて働き、その仕事に応じて支払いを受けるべきである。「共産主義的社会のより高次の段階、すなわち、分割

された労働への個人の隷属が消滅し、したがって精神労働と肉体労働の対立がなくなり、労働がたんなる生活の手段ではなくそれ自身第一の生活欲求となり、個人の全面的な発達とともに生産力が成長し、協同体的な富のすべての源泉がふれ出すとき、そのときはじめて狭い市民的な権利の限界が完全に踏み越えられ、社会はその旗に記すことができる——各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じてと⁽¹⁵⁾。

むしろ驚くべきことは、「一日の仕事に応じたよい報酬」という選択項目にたいする評価がもっと高くなかったことである。「自律的な責任ある仕事」と「変化に富んだおもしろい仕事」という二つの項目は労働過程そのものにかかわる指標である。(表1)によると、この二つの項目を選んだものの合計は「報酬」を選んだものよりも多い。このような価値判断は、生活の意味をまったく労働過程の外側だけに見出さなくなっている被調査者の要求を反映している。それは、この二つの工場における労働過程と社会環境が、将来において真の生活の充足はどの領域に求められるか——労働の外側にかそれとも労働のなかに——と公然と問うことをゆるすような諸契機を今日の程度まで有しているかを示しているように思われる。この設問からは、どの位多くの人々がこの質問を提起しているのみならず明瞭な答を用意さしているかは残念ながら出てこない。生活の充足として労働過程を優先するとしても、労働過程の外での欲求の満足を無視してはならないことが、(表2)の「報酬」の項目の平均値によって示されている。この平均値からは、多くの人がこの選択項目に最大ののではなくても二番目、三番目、四番目等々の意味を付していることを推定することができる。生産改革者と非改革者の対応する数値を比較してみると、生産改革者においては欲求構造の労働過程内の指標への相当の偏りがみられる。この偏りが異った労働条件に帰因すべきものであるか否かをさらにくわしく検討してみよう。すなわち問題は逆であつて、労働過程のなかに興味深い要素を発見できるということが、生産改革者の役割を果しうる能力の前提なのではないかという問がつけねにおこってくるのである。それどころではなく、理論的にみて革新性は労働過程そのものについて考えることのなかにあるといわねばならない。労働過程におけ

<表3.4>

労働生活に携わらない者	無関心		報酬		社会的評価		上司との関係		同僚との関係		自律的労働		興味ある労働条件		労働報酬との組合せ		その他		
	5	15	3	3	4	9	21	15	5	3	19	4	9	8	11	7	9	13	
単純作業	6	37	2	2	1	15	4	8	11	4	13	12	5	8	4	4	20		
複合作業	7	34	2	2	4	12	16	6	6	—	—	13	6	6	—	—	—	—	
自律的複合作業	13	25	—	—	6	—	13	11	4	4	33	13	11	4	4	4	4	33	
総合的作業	4	20	2	2	3	11	13	11	4	4	4	13	11	4	4	4	4	33	
修学年数																			
8年	6.3	24.9	2.9	2.9	3.4	10.7	13.7	10.3	6.6	4.3	17	13.7	10.3	6.6	4.3	4.3	4.3	17	
10年	5.7	7.2	1.4	1.4	5.7	11.4	20.0	17.1	5.7	2.9	22.9	20.0	17.1	5.7	2.9	2.9	2.9	22.9	
12年	2.2	8.7	—	—	2.2	6.6	32.7	13.1	2.2	2.2	30.2	32.7	13.1	2.2	2.2	2.2	2.2	30.2	

ング工場の二三八人の先進労働者について調査して、〈表1〉からえられた結果と類似のものをえた。創造的な先進労働者活動へ活発に参加するようになった労働者は何かという質問にたいする答として、七つの選択肢が与えられ、被調査者各自の判断にしたがって一つあるいはそれ以上を挙げさせた。〈表5〉に示された数字は、それぞれの動機を挙げた、男子(第一欄)女子(第二欄)先進労働者全体(第三欄)のパーセンテージである。

つぎに、理論的な部分で出しておいた問題を先に説明したとおりの六七七人の資料にもついで別の形で考察してみよう。質問は「良い労働者の基準は何ですか」というもので、選択肢は与えられていない。集まった答のなかから、次の七つのグループを組み立てた。(a) 助力を惜しまぬよい同僚であること、(b) 仕事における規律と確実性、(c) 徹底的、良心的であり、きちんとした質の高い仕事をする事、(d) 仕事外でも後ろ指をさされることのない道徳的態度を持つ事、(e) 専門的能力、知識、向上心、(f) 労働への自覚的態度、(g) 社会的(政治的)任務を進んでおこない、自己を政治的に訓練し、「あまりよくない労働者に影響をおよぼす」こと。多くの人が一項目以上をあげた。票数が計算された。表は各基準に投じられた票の頻度の分布をパーセンテージで示している。七つの項目のうち二つまたは三つを一括にあげたものをも総計すると、六七七人によつてのべ一一九〇の度数がえられ、そのうち、たとえば「助力を惜しまぬよい同僚であること」という基準は、一一・四パーセントという相対的度数

る問題点を発見する能力は、労働過程の共産主義的意味における変革のための積極的な可能性である。生産手段の社会主義的所有はこの可能性を完全に活動させるための前提条件なのである。

〈表1〉と〈表2〉をみてさらに目につくのは、「上司との好ましい関係」という選択項目の評価が「同僚との好ましい関係」の評価よりも低いことである。この二つの項目は労働過程における人間関係にかかわっている。社会主義的工場における労働過程も、資本主義的なそれと同様に、摩擦のない、できるだけ能率的な生産への関心のもとに厳密に組織されており、労働条件の形態は「上司」にかなり依存しているのであるから、たとえば旋盤工や機械工の職長や部課長にたいする関係は決してどうでもよいものではない。多くの点において、それは旋盤工や機械工にとって機械やベルトについて隣合せになる人びととの関係よりも重要である。もしも、同僚との関係が上司との関係よりもはるかに大きな役割を演じているとするならば、多くの労働者が「上司」を同僚とみなす傾向があると考えなければならぬ。そして、それはもちろん上司が事実において同僚であり、同志であり、友人であつてはじめて可能になるのである。たとえ「上司」が、労働過程のなかでの隣人と区別するために便宜上「上司」と呼ばれるとしても、彼らを同僚とみなすことが排除されているわけではないのである。

〈表3〉と〈表4〉は、それぞれの項目の選択がどの要因に依存しているかについての仮説をたてることを可能にする。〈表3〉の縦欄は次の事柄を示している。(a) 単調な動作の絶間ない反復からなる個別作業を行なう労働者、(b) 長い間隔をおいて繰り返されるいくつかの操作からなる作業をおこなう労働者、(c) (d) と同様の特徴をもつが、自分で機械を調整したり、設計図によつて作業をおこなう労働者、(d) 広範にわたる様々な操作を、資格もつて自分の判断でおこなう労働者(工具製作工・調整工・修理工・型製作工等の広い領域にわたる作業)、(e) 「物質的生产」に直接たずさわらない労働者。

ドイツ社会主義統一党中央委員会付属社会科学研究所の研究者は、石油精製工場とセメント工場とポール・ベアリ

<表 8>

所属組織	同僚的援助	労働規律	良心的な仕事	道徳的 生活態度	専門的 能力	労働への 自覚的態度	社会的 任務
SED	6.2	23.0	11.5	8.8	17.6	23.8	8.8
他組織	12.9	34.6	16.2	5.3	15.3	11.1	5.7
所属組織ナシ	13.8	42.1	17.4	4.6	11.0	7.3	3.7

<表 9>①

1. 直接生産に携わらない者	10.6	29.5	13.5	5.7	16.2	15.9	7.9
2. 総合的作業	10.9	28.7	18.2	5.7	21.8	10.4	4.1
3. 反復的・自律的作業	14.1	43.6	18.3	7.8	7.8	5.2	3.1
4. 単純作業	11.1	43.3	20.5	4.4	10.6	6.7	3.3

かる。規律や確実さは労働過程における必須条件であるが、しかし、それは具体的過程そのものにはかかわらないたんに外面的な条件である。同様の関係を人表 8、9 は示している。

所属組織別に区分されたグループを、さらに生産改革者と非改革者に区別してみると、生産改革者における対照は「社会的任務……」の項目を除けば非改革者の場合よりもいぢるしい。これは明らかに、比較されている性質——一定の組織に所属していることと、改革の創始者であること——は相互に強めあい、かなりの程度まで依存しあつて作用することを示している。完全を期するために職種による頻度の分布を示しておく。

人表 9 は労働の分割によつていぢるしい不利益を受け、単純労働に従事している人々がなお労働過程の内的、本質的徴候と、環境にたいする積極的なはたらきかけを驚くべく高く評価していることを示している。

ここ数年間に、これらの工場において労働への態度がどのように発展したかを推測できるような比較研究が発表されていないのは残念である。しかし、これらの労働者全員の世界観的な輪郭は社会主義的な生産条件によつてつくられたものであり、共産主義的な意味においてさらに変化していくであろうと考えることができる。

① K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, in: K. Marx/F. Engels, Kleine ökonomische Schriften, Dietz Verlag, Berlin, 1955, S. 138. 邦訳『経典・哲學

<表 5>

	男子	女子	全体
1. 計画遂行への配慮と責任感	66.9	60.9	65.9
2. 改革案の提議に対する報復等への個人的物質的関心	47.0	26.1	43.4
3. 自ら新しいものを創り出す専門的興味	63.5	52.2	61.6
4. 精神的労働への欲求	12.2	21.7	13.8
5. 労働を監獄することへの関心	64.4	78.3	66.8
6. 衛生・安全の改善の努力	45.2	43.5	44.9
7. 集団の中で個人的に認められようとする努力	13.4	17.3	13.8

<表 6>

	同僚的援助	労働規律	良心的な仕事	道徳的な生活態度	専門的 能力	労働への 自覚的態度	社会的 任務
工場I 生産改革者	8.2	30.3	14.6	6.2	17.9	12.9	9.6
工場II 非改革者	10.1	43.1	12.9	3.2	14.4	11.8	4.3
工場III 生産改革者	10.6	25.5	19.6	7.2	15.7	15.7	5.6
工場IV 非改革者	16.6	36.9	18.7	6.8	10.8	6.1	3.1

<表 7>

修学年数	同僚的援助	労働規律	良心的な仕事	道徳的な生活態度	専門的 能力	労働への 自覚的態度	社会的 任務
8年	11.8	34.6	17.1	5.8	14.4	10.8	5.5
10年	12.3	34.5	10.6	4.1	17.2	12.3	9.0
12年	7.2	24.5	18.4	9.2	15.3	20.4	5.1

の高さで目立っている。人表 6 は、生産改革者においては非改革者にくらべて、労働と社会的環境にたいする積極的なはたらきかけを表現するような基準が支持される傾向がより強いことを示している。「助力を惜しまぬよい同僚」と「社会的任務をおこない、あまり良くない労働者に影響を与える」という基準は、積極性の異った程度を表現するものとして比較することができる。遅れた労働者にはたらきかけけることは、当然考えられるように、助力を惜しまぬよい同僚であることを表現している。しかし、その援助はとくに仲間を励まし自分の力を使うことができるようにするためのものである。この差異が、人間性の形成にたいしてどんな意味をもつかは明白である。狭い意味での同僚的援助はそれだけのもので終るが、自発的活動は人間性を発展させ、さらに新たな発展の可能性を生み出す。さらにまた生産改革者においては「専門的能力や資格」が生産過程にたいする態度を特徴づけており、非改革者においては「労働規律、確実性」が好まれることがわ

- 草稿』(松塚・田中訳、岩波文庫版) 一四七頁。
- (2) K. Marx, Das Kapital. Dietz Verlag, Berlin 1952, Bd I., S. 599. und Band III, S. 935. 邦訳『資本論』(長谷部訳、草紙版) 第一巻、六九一―八九二頁。第三部下、一三三七―一三三八頁。
- (3) Ebenda. Band III, S. 377 f. und S. 928. 邦訳、第三部下 四八八頁以降、第三部下 二二七頁。
- (4) Ebenda. Band I. S. 598. 邦訳、第一部下 八九二頁。
- (5) Ebenda. Band I. S. 606. 邦訳、第一部下 九〇二頁。
- (6) Ebenda. Band I. S. 378. Vgl. auch. ebenda. S. 509. 邦訳、第一部下 五九七頁 同く 七七〇―九一九頁参照。
- (7) Ebenda. Bd I. S. 680. 邦訳、第一部下 九九八頁。
- (8) K. Marx/F. Engels, Die Deutsche Ideologie. Dietz Verlag, Berlin 1953. S. 34 f. ("Werke" Bd 3) 邦訳、『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店版) 第三巻 三〇―三二頁。
- (9) Vgl. K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag, Berlin 1953, S. 387 : K. Marx/F. Engels, Kleine Ökonomische Schriften S. 137 : Deutsche Ideologie. S. 37, 邦訳『経済学・哲学草稿』一四四頁、『全集』第三巻 三三三頁。
- (10) K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, S. 387.
- (11) K. Marx, 3. These über Feuerbach. 邦訳『全集』第三巻 四頁。
- (12) "Neues Deutschland", Berlin. 1, August. 1963.
- (13) ここに記した調査の中で先進労働者というのは、生産の改善のための提案を、少なくとも一回以上、工場の当該の機関にだして文書で提出した人々のことである。
- (14) 「その他」という分類の中には、第一位に選択されたものと並んでいくつかの項目があげられている回答をいれた。「無関心」という分類には、すべての項目に同じ順位をつけてある回答をいれた。全労働者にたいして先進労働者は、両工場とも約二〇パーセントである。
- (15) K. Marx/F. Engels, Werke, Bd. 19, Berlin 1952, S. 21. 邦訳『ユートピア綱領批判』(岩波文庫版) 二九頁。
- (16) 〈表9〉の省略の内容は次の通り。(1) 直接的に「物質的生产」に携わらない労働者(たとえば、管理、調査、開発部門の労働者)、(2) 広範囲にわたる作業をおこなう労働者(たとえば、工場職工、型鑄造工、修理工)、(3) 一連の反復的操作をおこなう労働者、およびそれを計画案にしたがっておこなう労働者、(4) 反復的な単純作業をおこなう労働者。

青少年問題の社会学的研究における 成果と問題について

ヴァルター・フリードリヒ

最近、しだいに多くの社会学者たちが青少年問題の経験的研究に従事するようになってきた。これは、人格形成の「過渡的年代」が心理学的に重要な機能をもっていることからでもあるが、それ以上に、われわれの社会主義社会が、知的にも性格的にも身体的にも有能な若い世代にたいして関心をもっているためである⁽¹⁾。

今日の若者は、今後五十年間の、技術的、社会的問題を解決するだけの能力をもたなければならない。彼らがどのようにそれを克服していくかは今日においてすでに決定されているのである。

現在発展させられつつある青少年問題の研究は、解決すべき一連の基本問題をかかえているが、研究全体の理論的―実践的有効性はその問題いかににかかわっている。

ここでは、もっとも重要な三つの問題に簡単に立ち入ってみよう。

1. われわれの青少年問題研究の方法論的基礎は、マルクス主義哲学たる弁証法的―史的唯物論である。史的唯物論は、人文科学の現代的認識と一致して人間の本質と発展を科学的に明確に規定するといひ、とくに重要な意味をも